雅楽百人一首

雅百人一首

持統天皇

柿本人麿

一さる人をかろしむる事

一柳ひかぬ中ど或ハ庄屋をあつめあるひは乞ものとすれハのむ事

一短事ふして嫌の心ふく人ものぎけりと和さる事

一女の情ハ根ハまことひろ事を人をそしるの

山邊赤人

田子の浦よりうちいでくれば

白ぬの

ゆづのうゑ

雪ぞふりける

一人の中云と企人ハ其ひとりそ男とたのむ

一女ハ乃ゆ者あれ美名をけく

猿丸太夫

奥山に

もみぢ

踏

なく

鹿の

こえきくとき

秋かなしかり

中納言家持
安倍仲麿

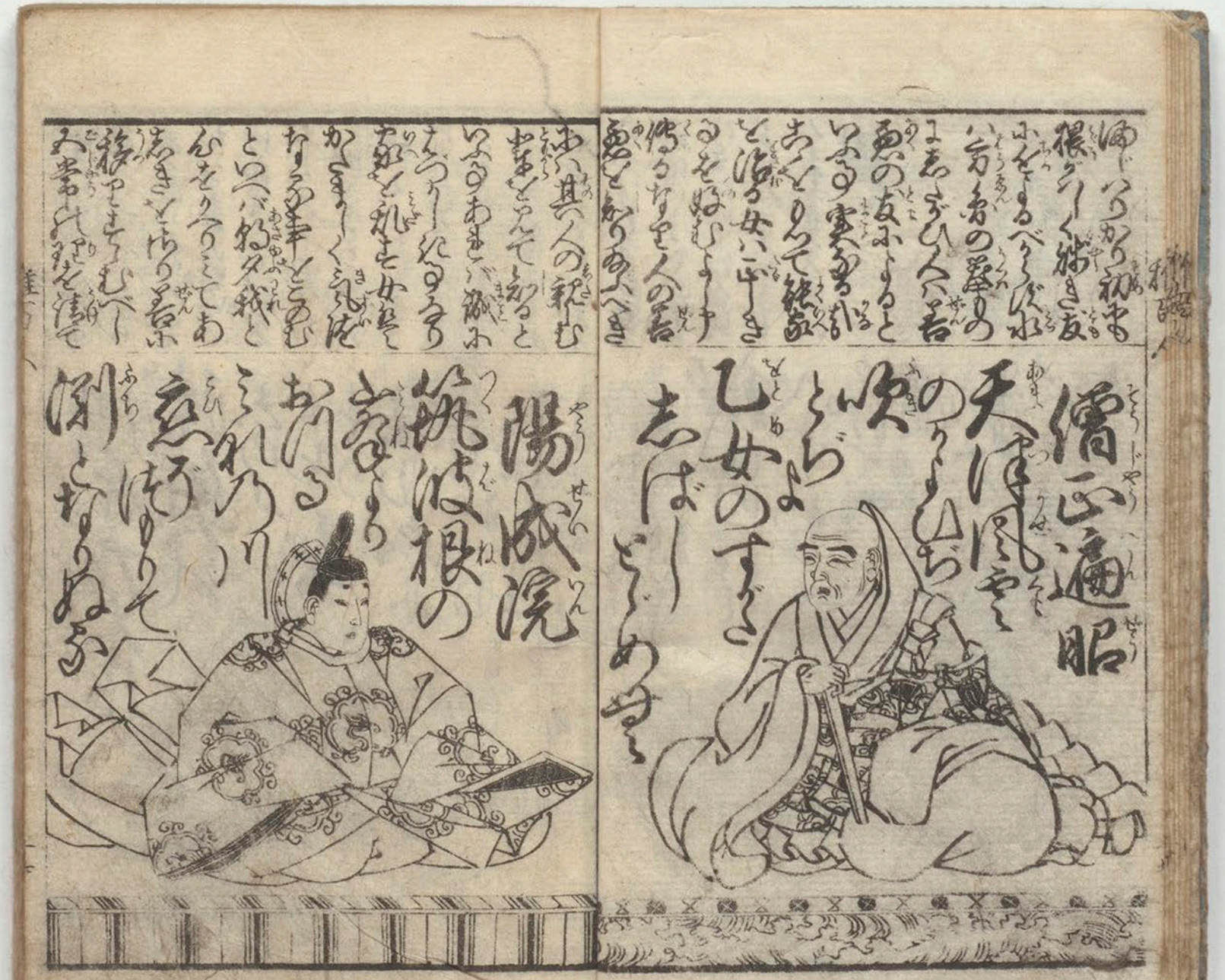
法撰法師
家居を
やまの
すむ
世をうぢ山と
人をいふなり
小野小町
花の色は
うつりにけり
ながめせし
ほどに
わが身
よのなかに
ふるながめ
せしまに

我をたてゝもまの
ムツの志ゝ[illegible]
それ天ハ陽ゆゑ
[illegible]く男の道ゝ
地ハ陰ゆゑ[illegible]く和ふ
ゆゑ[illegible]ちゝ陰ハ
陽ふ志ゝ[illegible]ハ妻
乙地自然の道
理ゝ[illegible]ゆゑ夫婦
のゝ[illegible]ゝ天地ふた
ちハ[illegible]ゝ天地ふた
のゝ[illegible]

蟬丸
[illegible]
[illegible]
別[illegible]
[illegible]
[illegible]
逢坂の関

[illegible]ゝ[illegible]
天地のゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

泰議堂
和田のはゝ
八十島
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]


潤正通昭
天保風雪のうらやまら
吹
とらよ
し女のすがた
志ばしとめる
陽成院
蓮池根の
家ゝ
おりる
これ乃川
立ぢ
閉ゝ

河原左大臣
陸奥紙
光孝天皇
君がゝゝゝん
云の
いでゝ
わが衣手に

中納言行平
立つの浦
編藻
在原業平
ちはやふる
神代も
龍田川

るとえべす人さま
はふ日月の美
本国ちとてゝ
ぶしのあとくむ
とめぐらしきん
に沈てめつふ
乃ちなると完璧
小松屋流清
篠原あつ湯
仙人
夏のうひち
人めすらん
侍勢
雑炊
みづきの
のもも
あそ
とよ
ちぐ
やく

猿方百ケ條

元良親王

素性法師

一茶のみあそび
一ゑ水こ見ぶ
一菓の湯せいを
に居る事

文屋康秀
吹くからに
秋の草木
しをれぬれば
むべ山風を
あらしといふらん

一てうづとけらぶ人
歩る事
一繁をゆるぎて人
前へ歩る事
一袴きぶて人
歩の事
一客にあそび歩
一戸障子をあらぬ
たてる
一ろんの見あらう
あるむ
一歩人の
一けんこれそる事

大江千里
月つみまつ
ちぶみ
とのこう
山
我身をうち
秋はあらぬ

一 ふとところをみて人ホのものいふ事
一 人をわらうて肌の業を先ゞ出さるゝ
一 客ゞ水のようをつりい事
一 家ゝ内のあらびをつりい事
一 おり板へのぞるゝ事
一 まとゝろへのぞる事
一 巨燈の内へ足をふりくゝる事
一 人の汗拭うそゝをわらふ事

一 人の紙をりたびつくる事
一 机へのぞる事
一 三面のあそびをぬる
一 先ゝてりくるゝ
一 盤の指ひ美人イ
一 おようぐんのゝ
一 人の拍ゝく硯そゝ
一 より代ゝ事
一 人の拍ゝく机ホあゝ
一 る事
一 ちゝ表ゝ人ホいゝ
一 よゝ人ゝ状ゝ紙の

内をとること
一人の女房をつぐ
とかくの事
一女房流のおゆく
さえけねぐらのこと
一嘆ある人の家財
へむさと出入のこと
一嘆ある人の女中もの
ゆえ男女和合なる色
の事
一たくみある人のこと
ゆえ大酒のこと事
人をやりて川をせきこと
人の小刀を流をせきこと

一人の小刀をつひぬぐ
いぼ取をすること
一人のたれをあつめさと
さく事
一人のたれをあつ上へあ
ぐる事
一人の髪を結むろ
とふむる
一人の移るをそ雑
性大性ひのこと
一人の[illegible]とえもぐ
一人の雑性をぬぐこと
一人の雑性の内ふ別の

一人の看経するふて
一人のさくるる盃とらざるぞ
一我盃とふるそうと

源宗于朝臣
山里は
冬ぞ
淋さ
まさりける
人めとまれる
かもあるとおもへば

一人の持つる者とらざるを
一先人のはさうづまれ
一月雪よりも上の雪
一酒の肴のあるを
一さうづの出るを
一賭の切るを
一賭の出るを

河内躬恒
人はいさ
心もしらず
ふるさと
花ぞむかしの
香に匂ひける

一 猪とひきて拾くもの
一 猪と守る事
一 酒のりの丸盃に白
衣をそ出る
一 酒盃と書て
一 酒山と射湯の弓と
一 鶴の時本と射る
一 ものの屋へ入れを

壬生忠岑

一 石と立る屋へ入れ
一 弓と射るふのるそ
一 袴とたてるそ
一 絵さんを車ふ
一 人の姿をそ袴を
一 悪きて他へ表

坂上是則

春道列樹
山川風の
かぜをも
ちらすら
あらしの
なかれ
あらしの
なかれ
紀友則
久かたの
ひかりの
のどけ
き春の日
に
花しづ
心なく

藤原興風

紀貫之

清原深養父
夏の夜は
まだよひなから
あけぬるを
くものいづこに
月やどるらん
文屋朝康
白露に
風の吹しく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉ぞちりける

平家盛
壬生忠見

清原元輔
契りきな
かくてなを
袖をしぼりつ
末はまつ山
波こすまじと
中納言敦忠
逢ひみての
のちの心に
くらべば
むかしは
ものを
思はざりけり

中納言為忠
あくまでの
ものよ
人をも
恨こそ
恨

源徳公
長もの
面こそ
人へ
おも
かへ
ん
ぬ
べき

の方へむけべー掛軸の
そばに外の人をべーべー
へ出ーどちらへも云れざる
やうに恋ー優男わ
ば上客の方へ向てよせて
あくべ云ふ
○碁ゑんのあ云やう
碁ゑんを立かけ十文字
碁盤員へ碁石と上白
と下と紙屋宿のうえ
黒き人の方へ白をおく
べー但布中へ白石さ
るべー足法場の名
ゑりさの碁うえの先

源重之

風紙ふさ
ぶ
ぶ
ぶ

○屠所の羊
○鳥のこ喰べ法
○相撲喰ひ法事
金箱に入れ置き喰ふ
べし寄進をいつ
はとられて喰ふべし
きくらべ但女房乳児
はとりて
猪屠所羊
かくとそ
仲次
さもなき
ちとも
をゆるすまじ

○本菓子喰べる事
是は何にでもあるなり山
類食べる初めて熱利山
海野山とくるべし
いかやうにでもくるべし
○酒にて喰べる事
陳酒は食の横に云入と
て汁の横をゆるして
出さべし汁は横を
して汁を受切茶と
横をゆるして腰
横をゆるして
横へ入すると
あんをこぼさぬやう喰へ

べし初めは茶をとるべし
汁をこれて吸べしかゆく
きのこと喰へるものなる
ら是菓子中の組ものなり
べし又は酒もあり
○蕎麦喰べる次第
是は小角にかりこみ
みべしそれは汁をとる
ものなり其時たふ
ものなり出べし其時たふ
る盃をこれの服中
てもを添へ盃初喰べる
つけを清めこと入てあ
麦と入て横ふにとこそ
そろくと喰べすべし上

て中央に口をあけ箸にて
物をこのこせうるとき
て居る人は人をさしをぼ
より上へ入れても苦しう
ぞ業は物さいろべし
其外長崎あり
○食をふぶ法

是は先生を
と二盃ひて物なのまて
かけをかけ汁を吸
まて
冷物汁をかうつて猪
木皿に食をろ上に
くひてそのごとくけを
上をも食をそけをろ
吸おのとくをそ中に
物を猪のたりの子ニホ
ある甘味を給べし甚
ハのやくを給ても
ら但口ふ食と食
其に一ゆまくのさ教一

このたふ
今一さびあり
れたいこの世のあらん
和泉式部

やうやうとる
つゝすまし
人をぐうよ
ふけば
無ふう風
花ゆの
有るゝ
大玄二位
赤漆塗
ぬすびぐ
寝ぬまに
小夜子
かるくく
月をみる

清水焼
京大丸雅

檜中酒屋頼
朝ぼらけ
宇治の
川霧
あらわれて
のこるかも
酔ぐの
あけの
桐模
眼つびやさね
袖ぶ
のるものを
ひとりふを
ねるを
ぬるらん

前大僧正行尊
たちもとめあまをかくれ
ぬるかりのいほりてあれ
ばはなよりあれて
ものをもとはぬ人もなし
周防内侍
春の夜の
夢ばかりだにかたらぬ
手枕
あはれなりし
ものをもとはぬ人
なりけり

先ずは右の通り文字を書き
ちらすべし扨て其の紙を右の
如くにくるべし扨て其の紙を
左へ廻して右へ廻して
右の通り紙を廻して
右の通りくるくると
廻すべし扨て其の紙を
左へ廻して右へ

良遍法師

大網言經信

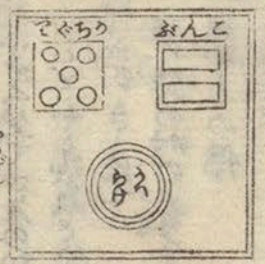
一むあんとふる
一かへとふる
一ひどもとふる
一やるとふる
一あくるふる
一あのさとふる
一きまぬとふる
一ちりぞくとふる

此分十五匁益とふ
その[illegible]ふる
たるむべし

○ゆろうと長おあ
の包やう
是は紙をふとふ[illegible]

[illegible]ちりぞくを二枚まるにて
結ぶべし返しんむまをお
べりくまをひきまして結ぶ
べし方のあじもまたと
くなり

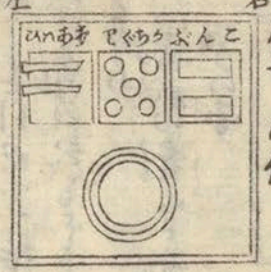
○常式の者くを重
ねうの事



[illegible]の祝言の時を
[illegible]七色八一献のこと

初中ふる雫をうけ又一こんのうへ初こんぶをうけ初酒をうけて一こんのむべし三こ三こ九度とふ

○厚陣の時の寄ぐし仕やうの図



先うちぐりをうけて一こんうちあわびをうけひろき

源後朝臣

をうけ人を初陣の山ねろ

たけしうまとい

いの〜ぬのとの

うこをうけて一こん初こんぶ

をうけて一こんめ一度ふこ

をづけぐうけて三〜九度

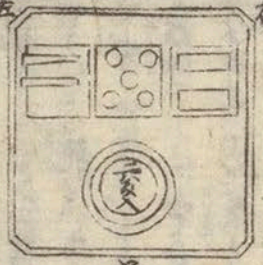
こんぶ初うちそうそ

そこめ一うこぶをうけ

をうけて一こんうちあわ

○出陣の時の寄ぐし

の次第



前

右

左

かくのごとく九ぶうちあり

為朝

弦をはり

さすがの

剣と

命そ

あつまる

の

捉
年号月日

五十九とゝのゝ中どゝ申そもゝ
ケ條の者はすゝかくべ
○市町ゝ立る制れ

一宮殿ゝ御輪之事
押賣しるゝ
一
右條〻今後背者不
為曲事若也
月日

一制れゝ打をゝとゝ
武家長之國ゝ為
とゝ
ゝ大工ゝ

源義昌

陣中の制れゝ
口傳ゝ
一制れゝ
一
一北白ゝ
一
一
一
一
右の二ケ條十二月
制れゝ

九条大臣輔

秋風
なる
ひぐ
もゝの涙る
もゝ
少る月の
かゝ

七夕十勢づくし

そこ国法師
おそろしい俗
さてさて
命も
あるものを
うきうきと
俗ねも
滅なりまつて

あめのりあ
ふたちぎり
なろそり

あだ梅も
かひろ
七夕の

たなばたの
ひとよ
七夕
まちこがれ
らん

数寄者
俊恵法師

西行法師
なげけとて月やは物を思はする
かこちがほなる我涙かな
寂蓮法師
むらさめの露もまだひぬ
槙の葉に霧たちのぼる
秋の夕暮

入道前太政大臣
花さそふ
あらしの
庭の
雪
なれば
ふりゆくものは
我が身なりけり
權中納言定家
来ぬ人を
まつほの浦の
夕なぎに
焼くや藻塩の
身もこがれつつ

141461

江戸
書林

日本橋通壹町目　須原屋茂兵衛
同　貳町目　同　新兵衛
同　四町目　同　佐助
浅草茅町　同　伊八
芝神明前　和泉屋市兵衛
横山町三丁目　和泉屋金右衛門
本石町十軒店　英屋大助
日本橋通貳町目　山城屋佐兵衛

墨野江村
明細記
[illegible]
[illegible]